

分析美学の諸問題

Problems of Analytic Aesthetics

- ① 美学(芸術学)の目的
- ② 芸術の定義
- ③ 作品と解釈
- ④ 美の定義
- ⑤ 美の論理学?
- ⑥ 美と意識
- ⑦ 美的と倫理的
- ⑧ 対象化
- ⑨ 情報美学
- ⑩ ジャンル
- ⑪ 進化美学
- ⑫ メタ芸術
- ⑬ 虚構
- ⑭ 観測選択効果(1)
- ⑮ 観測選択効果(2)

第6章 美と意識

機能的意識と現象的意識(主観的意識、経験的意識)

意識の易問と意識の難問

美と意識(クオリア)のパラレリズム

事実と価値との論理的断絶

創発(Emergence)とスーパービーニエンス(自然的Supervenience, 論理的Supervenience)

意識は物理的状态の上にSuperveneする? 論理的に? 自然的(形而上学的)に?

意識の個別化、境界の同定が重要

完全なコピーによって価値(人格)の保存は可能か(オリジナルの保存は影響するか)

美のクオリア?(←感情のクオリア?)

美的経験と美的ゾンビ(美に関わる主観的経験のみが欠落した部分的ゾンビ?)

美は機能的価値か、内在的価値か 経験とは独立に芸術作品は価値を持つか

■機能的・構造的データへの論理的Supervenienceが言えない例

- ・クオリア
- ・外界
- ・価値?

■機能的・構造的データへの論理的Supervenienceが言える例

- ・因果、法則 (ヒュームの因果論が尤もらしいのは論理的Supervenienceゆえ)
- ・普遍、抽象的对象 (唯名論が尤もらしいのは論理的Supervenienceゆえ)
- ・価値? (価値の(非)实在論が尤もらしい? のは論理的Supervenienceゆえ??)
あるいは自然的Supervenienceをも拒むゆえ??

心身二元論を擁護する論法

ゾンビ論法 (唯物論(物理主義)の否定)

- ① クオリアは存在する
- ② 物理的状态は実在する
- ③ 物理的状态を指定しても、クオリアの有無は演繹されない(哲学的ゾンビは論理的に可能である)
- ④ 物理的状态の完全な記述から洩れる対象が存在する (①③より)
- ∴ ⑤ 物理的对象と非物理的对象とがある(物理主義は偽である)

- ①→ クオリアは錯覚である?
- ②→ 観念論の可能性
- ③→ クオリアは機能に還元できる? (心脳同一説から機能主義へ)
- ④→ 「完全な記述」とは? クオリアを物理的状态に追加できないのか
- ⑤→ 非物理的事実は不可解ではない(因果、普遍、数学的对象、虚構的对象.....)
- ⑥ 「存在」「有無」の多義性?

- ① 外界は存在する
- ② 意識は実在する
- ③ 意識状態を指定しても、外界の有無は演繹されない
- ④ 意識状態の完全な記述から洩れる対象が存在する (①③より)
- ∴ ⑤ 意識と非意識とがある(観念論は偽である)

- ①→ 外界は錯覚である? 観念論の可能性
- ②→ ゾンビの可能性
- ③→ 外界は意識内容に還元できる? 一元論の可能性
- ④→ 「完全な記述」とは? 外界を意識状態に追加できないのか
- ⑤→ 非意識は不可解ではない(因果、普遍、数学的对象、虚構的对象.....)
- ⑥ 「存在」「有無」の多義性?

心身一元論を擁護する論法

(デイヴィッド・チャーマーズ 『意識する心』 白揚社)

現象判断のパラドクス(心身二元論の否定)

- ① 現象判断は、機能的出来事である
- ② 機能的出来事は、物理的出来事である
- ③ 人間も哲学的ゾンビも、現象判断を行なうことができる(①②より)
- ④ 現象判断は、意識現象によって引き起こされるのではない(③より)
- ⑤ 現象判断にとって、意識現象は必要ではない(④より)
- ⑥ 現象判断の指示対象は、意識現象である
- ⑦ 判断が意味を持つためには、指示対象が必要である
- ⑧ 現象判断は意味を持つ
- ⑨ 現象判断にとって、意識現象は必要である(⑥⑦⑧より)
- ⑩ 現象判断にとって、意識現象は、必要でありかつ不要である(⑤⑨より)(矛盾)
- ∴ ⑪ 意識現象は、存在しない(人間はみな哲学的ゾンビである)(⑩と現象判断の实在より)

⑤→ 共通原因(神経系状態)の結果にはなりうる(随伴現象説)

⑦→ 指示対象を欠いても意味を持ちうる。偽なる判断の場合。哲学的ゾンビの現象判断はすべて偽である

⑩→ ⑤の「必要ではない」は原因としての不要性。⑨の「必要である」は意味論的な必要性。指示の因果説を前提しない限り、原因ではない指示対象を認めてよい。(cf. 数学的命題)

観念論を擁護する論法

現象判断のパラドクス(心身二元論の否定)の「外界否定論」バージョン

- ① 外界判断は、構造的出来事である
- ② 構造的出来事は、意識的出来事である
- ③ 物理的人間も観念的人間も、外界判断を行なうことができる(①②より)
- ④ 外界判断は、外界によって引き起こされるのではない(③より)
- ⑤ 外界判断にとって、外界は必要ではない(④より)
- ⑥ 外界判断の指示対象は、外界である
- ⑦ 判断が意味を持つためには、指示対象が必要である
- ⑧ 外界判断は意味を持つ
- ⑨ 外界判断にとって、外界は必要である(⑥⑦⑧より)
- ⑩ 外界判断にとって、外界は、必要でありかつ不要である(⑤⑨より)(矛盾)
- ∴ ⑪ 外界は、存在しない(人間はみな観念的人間である)(⑩と外界判断の实在より)

⑤→ 何らかの共通原因の結果にはなりうる(互いに必要条件となりうる)

⑦→ 指示対象を欠いても意味を持ちうる。偽なる判断の場合。観念的人間の外界判断はすべて偽である

⑩→ ⑤の「必要ではない」は原因としての不要性。⑨の「必要である」は意味論的な必要性。指示の因果説を前提しない限り、原因ではない指示対象を認めてよい。(cf. 数学的命題)

外界の存在を擁護する確率的論証 前提④への反駁

外界のベイズ的实在論 その1

- ① 意識から独立した外界は存在する(A)か、存在しない(B)かどちらかである
- ② Aの場合、複数の意識内容が同一の情報を伝える(主観的経験が収斂する)確率は高い
- ③ Bの場合、複数の意識内容が同一の情報を伝える(主観的経験が収斂する)確率は低い
- ④ 私の複数の意識内容は、多くの場合、同一の情報を伝える(主観的経験は収斂する)(D)
- ∴ ⑤ Dに条件づけると、AがBより正しい確率が高い

- ①→ 「外界」「独立」の意味が明確であるか
- ②→ 外界と意識の連動は外界が意識内にある証拠ではないか
- ③→ 法則が意識を律しているのではないか
Dは意識の要件ではないか(観測選択効果)
- ④→ 同一の情報として意識が解釈しているだけではないか
- ⑤→ 確率そのものが意識の産物ではないか
(確率の主観的解釈)
- ⑥ AとBの事前確率の評価が必要である

外界のベイズ的实在論 その2

- ① 意識から独立した外界は存在する(A)か、存在しない(B)かどちらかである
- ② Aの場合、意識が予期せぬ驚くべき整合的諸事実が露見する確率は高い
- ③ Bの場合、意識が予期せぬ驚くべき整合的諸事実が露見する確率は低い
- ④ 私の意識が予期せぬ驚くべき整合的諸事実がしばしば露見してきた(E)
- ∴ ⑤ Eに条件づけると、AがBより正しい確率が高い

- ①→ 「外界」「独立」の意味が明確であるか
- ②→ 意識そのものに自己を裏切るシステムが組み込まれているのではないか
- ③→ 自己充足的な意識の論点先取ではないか
Eは意識の要件ではないか(観測選択効果)
- ④→ 「驚くべき」「整合的」と意識が解釈しているだけではないか
- ⑤→ 確率そのものが意識の産物ではないか
(確率の主観的解釈)
- ⑥ AとBの事前確率の評価が必要である

外界の存在を擁護する確率的論証 前提④への反駁

外界のベイズ的实在論 その1

- ① 意識から独立した外界は存在する(A)か、存在しない(B)かどちらかである
- ② Aの場合、複数の意識内容が同一の情報を伝える(主観的経験が収斂する)確率が高い
- ③ Bの場合、複数の意識内容が同一の情報を伝える(主観的経験が収斂する)確率は低い
- ④ 私の複数の意識内容は、多くの場合、同一の情報を伝える(主観的経験は収斂する)(D)

∴ ⑤ Dに条件づけると、AがBより正しい確率が高まる (Bに対してAが確証される)

(AとBの事前確率が等しければ、事後確率はAの方が大きい)

$$P(A | D) \\ = P(A \wedge D) / P(D) = P(D | A) P(A) / P(D)$$

$$P(A | D) / P(B | D) \\ = (P(D | A) / P(D | B)) \times P(A) / P(B)$$

②③により、 $P(D | A) > P(D | B)$

ゆえに $P(D | A) / P(D | B) > 1$

よって、 $P(A | D) / P(B | D) > P(A) / P(B)$

外界のベイズ的实在論 その2

- ① 意識から独立した外界は存在する(A)か、存在しない(B)かどちらかである
- ② Aの場合、意識が予期せぬ驚くべき整合的諸事実が露見する確率が高い
- ③ Bの場合、意識が予期せぬ驚くべき整合的諸事実が露見する確率は低い
- ④ 私の意識が予期せぬ驚くべき整合的諸事実がしばしば露見してきた(E)

∴ ⑤ Eに条件づけると、AがBより正しい確率が高まる (Bに対してAが確証される)

(AとBの事前確率が等しければ、事後確率はAの方が大きい)

$$P(A | E) \\ = P(A \wedge E) / P(E) = P(E | A) P(A) / P(E)$$

$$P(A | E) / P(B | E) \\ = (P(E | A) / P(E | B)) \times P(A) / P(B)$$

②③により、 $P(E | A) > P(E | B)$

ゆえに $P(E | A) / P(E | B) > 1$

よって、 $P(A | E) / P(B | E) > P(A) / P(B)$

クオリアの存在を擁護する確率的論証？ 前提⑤への反駁？

外界のベイズ的实在論 その1

- ① 神経系の結果としてのクオリアは存在する(A)か、存在しない(B)かどちらかである
 - ② Aの場合、複数の現象判断が同一の情報を伝える(物理的動作が収斂する)確率が高い*
 - ③ Bの場合、複数の現象判断が同一の情報を伝える(物理的動作が収斂する)確率が高い*
 - ④ 私の複数の現象判断は、多くの場合、同一の情報を伝える(物理的動作は収斂する)(D)
- ∴ ⑤ Dに条件づけても、AがBより正しそうかどうかは変化しない (AもBも確証されない)
(事前確率が等しければ、事後確率も等しい)
- * 外界の存在、または認識的人格の観測選択効果より

$$P(A | D) \\ = P(A \wedge D) / P(D) = P(D | A) P(A) / P(D)$$

$$P(A | D) / P(B | D) \\ = (P(D | A) / P(D | B)) \times P(A) / P(B)$$

- ②③により、 $P(D | A) = P(D | B)$
ゆえに $P(D | A) / P(D | B) = 1$
よって、 $P(A | D) / P(B | D) = P(A) / P(B)$

外界のベイズ的实在論 その2

- ① 神経系の結果としてのクオリアは存在する(A)か、存在しない(B)かどちらかである
 - ② Aの場合、意識が予期せぬ驚くべき整合的諸事実が露見する確率が高い*
 - ③ Bの場合、意識が予期せぬ驚くべき整合的諸事実が露見する確率が高い*
 - ④ 私の意識が予期せぬ驚くべき整合的諸事実がしばしば露見してきた(E)
- ∴ ⑤ Eに条件づけても、AがBより正しそうかどうかは変化しない (AもBも確証されない)
(事前確率が等しければ、事後確率も等しい)
- * 外界の存在、または認識的人格の観測選択効果より

$$P(A | E) \\ = P(A \wedge E) / P(E) = P(E | A) P(A) / P(E)$$

$$P(A | E) / P(B | E) \\ = (P(E | A) / P(E | B)) \times P(A) / P(B)$$

- ②③により、 $P(E | A) = P(E | B)$
ゆえに $P(E | A) / P(E | B) = 1$
よって、 $P(A | E) / P(B | E) = P(A) / P(B)$

客観的な美の存在を擁護する確率的論証 外界の擁護をモデルに

客観的美のベイズ的实在論 その1

- ① 意識から独立した美は存在する(A)か、存在しない(B)かどちらかである
 - ② Aの場合、複数の意識内容が同一の評価を下す(主観的評価が収斂する)確率が高い
 - ③ Bの場合、複数の意識内容が同一の評価を下す(主観的評価が収斂する)確率は低い*
 - ④ 私の複数の意識内容は、多くの場合、同一の評価を伝える(主観的評価は収斂する)(D)?
- ∴ ⑤ Dに条件づけると、AがBより正しい確率が高まる (Bに対してAが確証される)
- (事前確率が等しければ、事後確率はAの方が大)
- * 美的人格の非統合性(第5章)による

$$P(A | D) \\ = P(A \wedge D) / P(D) = P(D | A) P(A) / P(D)$$

$$P(A | D) / P(B | D) \\ = (P(D | A) / P(D | B)) \times P(A) / P(B)$$

- ②③により、 $P(D | A) > P(D | B)$
ゆえに $P(D | A) / P(D | B) > 1$
よって、 $P(A | D) / P(B | D) > P(A) / P(B)$

客観的美のベイズ的实在論 その2

- ① 意識から独立した美は存在する(A)か、存在しない(B)かどちらかである
 - ② Aの場合、意識が予期せぬ驚くべき整合的諸評価が露見する確率が高い
 - ③ Bの場合、意識が予期せぬ驚くべき整合的諸評価が露見する確率は低い*
 - ④ 私の意識が予期せぬ驚くべき整合的諸評価がしばしば露見してきた(E)?
- ∴ ⑤ Eに条件づけると、AがBより正しい確率が高まる (Bに対してAが確証される)
- (事前確率が等しければ、事後確率はAの方が大)
- * 美的人格の非統合性(第5章)による

$$P(A | E) \\ = P(A \wedge E) / P(E) = P(E | A) P(A) / P(E)$$

$$P(A | E) / P(B | E) \\ = (P(E | A) / P(E | B)) \times P(A) / P(B)$$

- ②③により、 $P(E | A) > P(E | B)$
ゆえに $P(E | A) / P(E | B) > 1$
よって、 $P(A | E) / P(B | E) > P(A) / P(B)$

主観的な美の存在を擁護する確率的論証？ クオリアの擁護をモデルに？

主観的美のベイズ的实在論 その1

- ① 意識の結果としての美は存在する(A)か、存在しない(B)かどちらかである
- ② Aの場合、複数の意識内容が同一の評価を下す(主観的評価が収斂する)確率は低い*
- ③ Bの場合、複数の意識内容が同一の評価を下す(主観的評価が収斂する)確率は低い*
- ④ 私の複数の意識内容は、多くの場合、同一の評価を伝える(主観的評価は収斂する)(D)？

∴ ⑤ Dに条件づけると、AがBより正しそうかどうかは変化しない (AもBも確証されない)

(事前確率が等しければ、事後確率も等しい)

* 美的人格の非統合性(第5章)による

$$P(A | D) \\ = P(A \wedge D) / P(D) = P(D | A) P(A) / P(D)$$

$$P(A | D) / P(B | D) \\ = (P(D | A) / P(D | B)) \times P(A) / P(B)$$

②③により、 $P(D | A) = P(D | B)$

ゆえに $P(D | A) / P(D | B) = 1$

よって、 $P(A | D) / P(B | D) = P(A) / P(B)$

主観的美のベイズ的实在論 その2

- ① 意識の結果としての美は存在する(A)か、存在しない(B)かどちらかである
- ② Aの場合、意識が予期せぬ驚くべき整合的諸評価が露見する確率は低い*
- ③ Bの場合、意識が予期せぬ驚くべき整合的諸評価が露見する確率は低い*
- ④ 私の意識が予期せぬ驚くべき整合的諸評価がしばしば露見してきた(E)？

∴ ⑤ Eに条件づけると、AがBより正しそうかどうかは変化しない (AもBも確証されない)

(事前確率が等しければ、事後確率も等しい)

* 美的人格の非統合性(第5章)による

$$P(A | E) \\ = P(A \wedge E) / P(E) = P(E | A) P(A) / P(E)$$

$$P(A | E) / P(B | E) \\ = (P(E | A) / P(E | B)) \times P(A) / P(B)$$

②③により、 $P(E | A) = P(E | B)$

ゆえに $P(E | A) / P(E | B) = 1$

よって、 $P(A | E) / P(B | E) = P(A) / P(B)$

「美」の存在は、「意識(クオリア)」の存在に比べると、確率的な仮説検定を受け付けるため、より論証的・客観的な議論がしやすいテーマである。

.....

■仮説検定についての補足

仮説Aを、対立仮説Bとの比較においてではなく、単独で検証する場合、データDの確率P(D)を求める必要が生ずる。(対立仮説の比較では、比をとるとP(D)は共通の分母ゆえ消去された)

$$P(A | D) = P(A \wedge D) / P(D) = P(D | A)P(A) / P(D) = P(D | A)P(A) / (P(A \wedge D) + P(\sim A \wedge D)) \\ = P(D | A)P(A) / (P(D | A)P(A) + P(D | \sim A)P(\sim A))$$

↑ Aと~A(Aでない)とで分母を場合分けしただけ(場合が多数の場合は、項を増やせばよいだけ)

★練習問題:健康診断問題——

1万人に一人が罹る重病Kの検査を受けた。その検査は99%正しい結果の出る検査である(擬陽性、擬陰性はともに1%)。さて、あなたは陽性が出てしまった。あなたがKに罹っている確率は?

Kに罹っている………A Kに罹っていない………~A 陽性が出た………D

$$P(A | D) = P(A \wedge D) / P(D) = P(D | A)P(A) / P(D) \\ = P(D | A)P(A) / (P(D | A)P(A) + P(D | \sim A)P(\sim A)) = 1 / 102$$

↑素朴な人は「99%」と答えがちだが、それは事前確率P(A)とP(~A)の差を考慮に入れない誤り。

1/1万という事前確率(もともと百万人のうち100人がK、999900人が非K)は、計算に効いてくる。

K100人のうち陽性は99人、非K999900人のうち擬陽性が9999人。その合計があなたの準拠集団(属する母集団・陽性になった人々)であるから、その中であなたがKである確率は99/(99+9999)

それが上の計算(ベイズ式)の意味である。

同様の仮説検定(仮説の事前確率から、データに条件付けた事後確率を求める計算)が、哲学説(の信憑性の査定)にも当てはまるというのが本章の趣旨であった。

David J. Chalmers *The Character of Consciousness* (Oxford U.
P. 2010)

デイヴィッド・チャーマーズ『意識する心』白揚社

金杉武司『心の哲学入門』勁草書房

ジュリアン・バジーニ『100の思考実験』紀伊國屋書店
pp.340-343

三浦俊彦「概念的命題、反経験的命題の確率的確証」
<http://members.jcom.home.ne.jp/miurat1/kakuritu.pdf>